

3. 現況の評価及び課題の抽出

評価期を環境保全と活用に関するものに区分して、それぞれの項目について、その抽出理由と評価結果について以下の表に取りまとめて示す。

表1-1 環境保全項目の抽出理由と評価結果総括表

大項目	小項目	抽出理由	評価結果
自然的環境保全	潟特有の植物の保全	かつてはオニバスやヒシをはじめとする潟特有の植物が豊富に生育していたが、干拓や水位の低下によって陸地化が進み、ヨシやマコモを中心とする単調な植生に変化してしまった。従って、植生的には保全というより、回復のための手法が必要である。	現況における植物相の貧弱な理由として、①停滞水域の欠如、②水位の変動、③流入水の汚染、④ヨシなどの高茎草本の繁茂と有機物の堆積（富栄養化の進行）、⑤ヘドロの堆積、などが挙げられる。
	野鳥の生息環境の保全	潟は世界的にみても貴重な野鳥の生息地であり、特に福島潟は環境庁の一級鳥類観測ステーションも設置されている。現在でもハクチョウやヒシクイをはじめとして100種類以上の野鳥が確認されている。	福島潟の鳥類相の豊かさは広い内水面と移水帯が共に存在する中で保たれてきたが、水位の低下によって内水面の面積が減少し、陸化が進行しているため水鳥の生息環境は悪化してきている。
	淡水魚や水性昆虫の生息環境の保全	福島潟の水環境のバロメーターとして淡水魚や水性昆虫は重要な意味を持つ。また潟の生態系を構成する重要な生物群である。	水質の悪化で魚類も激減している。水位の変動がなければコイ科の淡水魚は生育可能な環境である。
	自然的景観の保全	「21世紀に残したい日本の自然100選」や「にいがたの景勝100選」に数えられている景勝地であり、景観の保全は重要な使命である。	潟を眺めるための場所がなく景観の構成要素が単調なので、水面の確保や多様な植生にする等魅力ある景観対象をつくり出すことが必要。
	水質の保全	水質の悪化は福島潟そのものだけの問題ではなく、流域全体の問題として広域的な協力体制が必要であり、生物環境の保全に直接影響する重要な項目である。	流入する河川の浄化が必要。特に流域の下水道の完備が待たれる。また、農薬・肥料等の流入が問題で、潟内としては富栄養化を防ぐためにヨシやマコモも火入れや刈取りが望まれる。
社会的環境の保全	治水・利水機能の保全（安全性）	住民の生活環境の安全性を確保するための最も重要な機能であり、また農業生産の基盤を支える大切な機能である。	福島潟放水路や湖岸堤の計画はあるが、かなり長期的になるため、遊水池としての洪水調節機能を十分発揮できるよう平常時の水位は現況の-0.5mを維持する必要がある。
	生活空間としてのアメニティの保全（快適性）	人は安全で快適な生活空間を求めており、単に安全性の機能確保だけでは不十分である。よって、福島潟が周辺住民にとって快適空間であるための要素が求められる。	地域住民にとっての安全対策の早期実現が第一で、次いで快適性や利便性の向上が必要である。現在のおかりにくさが親しみのなさにつながっており、利便性を高めてもっと多くの人に認識してもらう必要がある。
	歴史的・文化的環境の保全	福島潟及び周辺地域がこれまで築き上げてきた歴史の重みを後世に伝え、現代に生きる我々がどのように新たな文化を積み上げていくか、その責任は重大である。	個性のない町豊栄市となってしまう。地域アイデンティティを創り上げるためには福島潟は重要な位置にある。

表1-2 活用に関する評価項目の抽出と評価結果総括表

項目	抽出理由	評価結果
植物の観察や学習	現在の福島潟は植生的な魅力に欠けるが、今後各種の方法で植物の生育環境が整えられると、人工的に造られた環境下からではあるが、植物の新たな遷移の状況が観察でき、オニバスなどの復活も可能である。	福島潟は現在でも環境庁の1級鳥類観測ステーションが設置されており、鳥類の研究の場としての評価は高い。これは国内、外の事例からも福島潟は決してそれに劣らないポテンシャルを有していることは確かである。また、植物相については昔と違って現況では、特に価値のある群落や種は認められないが、これからの計画の中でそれらの復元対策が構じられれば新しい植物の再生過程が観察できる。これらの学習や研究の場としての活用は単にそれぞれの分野が独立して行うのではなく、福島潟の生物環境全体を生態系として捉えた視点で紹介や研究がなされることが望ましい。その意味でもイギリスのスリムブリッジのような研究機関を併設したしっかりしたビジターセンターが必要である。
野鳥の観察や学習	瓢湖とは違った自然の状態の野鳥が観察でき、そのための施設を充実させることによって、国際的なバードサンクチュアリーとして十分位置づけられるキャパシティがある。	
淡水魚、水生昆虫の観察や学習	現在はほとんど見るべきものはないが、福島潟の生態系を構成する重要な生物群として位置づける必要がある。	
潟の自然や景観の鑑賞	景観的要素の分析を行って、潟の自然をより良い形で保全しながら景観的付加価値を高めていくことを検討する必要がある。	自然的景観の保全に同じ。
観光レクリエーション	地域住民のアメニティ空間や来訪者が楽しめる水辺空間創出のために観光レクリエーション機能についての評価も行う。	観光レクリエーションの機能だけを切離して考えるのではなく、学習や研究とドッキングした質の高い活用が望まれる。

4. 潟の保全と活用に関する事例調査

本研究は潟環境の保全と活用という時代的要求度の比較的高い研究であるが、これまで総合的に計画されて成功を見ている地域は少ない。そこで類似した状況にある地域がどのような問題を抱えているのかについて国内、国外計8ヶ所の事例調査をおこなった。以下にその要点を述べる。

表2 事例調査結果一覧表

項目	現況と問題点	事例調査地
環境保全に関する項目	①陸化が水鳥の生息環境を悪化させている。	鴨池（石川県）、ウトナイ湖（北海道）、チャンピット（スイス）
	②水位の変動や水質汚濁が水生植物を衰退させている。	伊豆沼（宮城県）、ウトナイ湖（北海道）、チャンピット（スイス）
	③地元住民の関心が高く、誇れる場所として認識度が高い。	ウトナイ湖（北海道）
	④水質の悪化が観光的なイメージの悪化にもつながっている。	宍道湖（島根県）
	⑤保護地区と利用地区をはっきりゾーン区分することによって、一般利用者も十分楽しめる施設整備がされている。	スリムブリッジ（イギリス）
	⑥野鳥の生態が近くで観察できる施設がある。	鴨池（石川県）、伊豆沼（宮城県）、スリムブリッジ（イギリス）

活用に関する項目	⑦公園レンジャーが常駐していて、来訪者に対してレクチャーを行っている。	ウトナイ湖（北海道）、エバーグレイズ（アメリカ）、スリムブリッジ、ウェルニー（イギリス）、チャンピット（スイス）
	⑧バードサンクチュアリーとしての施設が整備されている。	ウトナイ湖（北海道）、伊豆沼（宮城県）、鴨池（石川県）、スリムブリッジ、ウェルニー（イギリス）
	⑨野鳥の飛来時期と稲の収穫時期を品種の切換えや機械化等によってずらし、農作物に対する野鳥の食害を防いで両立を図っている。	伊豆沼（宮城県）
	⑩観光的施設が併設されて世界中から多くの人を訪れている。	エバーグレイズ（アメリカ）
	⑪学習の場として活用できる施設が整っている。	ウトナイ湖（北海道）、エバーグレイズ（アメリカ）、スリムブリッジ（イギリス）、チャンピット（スイス）